

全学学類・専門学群・総合学域群代表者会議

第一回本会議

令和7年5月7日（水）

（議事次第）

議題

・議長団選挙（議長選挙/副議長選挙）

タイムテーブル

当日の時刻	予定した日程
18:30	開会
18:30-18:38	出欠確認・資料確認
18:38-19:16	議長選挙
19:16-19:35	議長選挙の投票
19:35-20:55	副議長選挙
20:58	休会

出席者

学類等代表者 63 名 詳細省略

資料一覧

議題 「議長団選挙」

- ・ 令和 7 年度議長団選挙について
..... P25001-00
- ・ 令和 7 年度議長団選挙立候補者一覧
..... P25001-01
- ・ 令和 7 年度議長団選挙実施要項
..... P25001-02
- ・ 学長決定「筑波大学の学生組織等について」
..... P25001-03
- ・ 副学長決定「筑波大学における学生の組織及びクラス連絡会等について」
..... P25001-04
- ・ 「全学学類・専門学群・総合学域群代表者会議について」
..... P25001-05

以下、議事録

開会

○近藤 拓未（令和 6 年度議長）

これより、令和 7 年度第一回本会議を開会する。

出席確認・資料確認

○近藤 拓未（令和 6 年度議長）

出席者を確認する。慣例に基づき、読み上げられた学類に在籍する代表者の挙手をもって出席とする。
円滑な議事進行のため、参加者においては、適宜資料を確認されたい。

出席確認の詳細は省略

○近藤 拓未（令和 6 年度議長）

学类等代表者の出席者は 63 名である。本会議の定足数を満たしたことを確認した。

議題

○近藤 拓未（令和 6 年度議長）

議事次第に則り、これより令和 7 年度議長団選挙を行う。議長団選挙の細則については P25001-02 に書いてあるので参照されたい。

○近藤 拓未（令和 6 年度議長）

まず、議長選挙を行う。議長立候補者は前に出ていただきたい。

議長選挙、副議長選挙の投票方法の詳細は省略

（注：議長演説は発言の意図を反映するために敬体とする）

○吉川 椋（議長候補）

こんにちは。議長に立候補いたしました、工学システム学類の吉川椋と申します。

皆さんはどのようなきっかけで全代会に参加していますか。ポジティブなものからネガティブなものまで、様々な思いを抱えて全代会に参加されている方が多いのではないかと思います。そうした中で、私は誰もが「全代会に入って良かった」と感じられる組織を実現したいと考えています。このような思いから、私は「誇れる全代会、誇れる自分」というテーマを掲げます。全代会を活性化させることにより、一人ひとりが学生の代表であるという意識を持つようになることが、テーマ実現への鍵だと考えています。

次に私が議長になったら実施する 3 つの公約を話していきます。

まず 1 つ目は、委員会活動のタスクを適切に割り振ることです。これまでの全代会では、タスクが一人に集中してしまう傾向が見られました。これを解決するために、マニュアル整備を進め、タスクを分散する環境を整えます。環境整備を進めると同時に、私自身が委員会に参加し、その雰囲気や委員一人ひと

りの希望・関心を把握します。その上で、個々のモチベーションに合ったタスクの割り振りを行っていきます。

2つ目は、参加しやすい本会議を作ることです。昨年度の全代会では、議員の参加率が低く、会議進行に支障をきたす可能性も高い状態でした。その原因として、長期化する会議時間が挙げられます。これを解決するために、会議の円滑な進行を目指し、事前告知に余裕を持たせることに加えて、新入生にも分かりやすい資料の作成や、出席確認の方法を見直すことを検討しています。

3つ目は、国際化を推し進めることです。具体的には、筑波大学マレーシア校の学生が全代会に参加できる体制を整えたいと考えています。昨年度の海外研修において、マレーシア校の学生と交流を持ち、全代会や、筑波キャンパスとの交流を求める声を直接聞きました。それを受けて、今年4月からオンラインミーティングを開始しています。議長になった際は、将来的にマレーシア校特別委員会の設立を目指し、国際化の推進を図ります。

以上の3つの公約を通じて、一人ひとりに学生の代表意識が醸成され、結果的に「誇れる全代会、誇れる自分」のテーマが実現できると考えています。皆さんの清き一票をよろしくお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

○近藤 拓未（令和6年度議長）

これから質疑応答を行う。

○相川 大惺（医学類）

本会議の改革はいつ頃から行うつもりか。

○吉川 柊（議長候補）

余裕を持った告知や各資料の概要、議題が提出された背景については、次回の本会議の告知から実践するつもりだ。告知に関しては議題の提出者によるところもあるが、1週間前を目処に遅くても前日にはアップロードしたい。各資料の概要についても資料が提出され次第まとめるだけなので次回から実践できている。効率的な議事進行については、当選した他の議長団のメンバーや総務委員会との話し合いが必要なので、早くて次回、少なくとも第3回以降の本会議から実践できれば、と考えている。

○相川 大惺（医学類）

質問がもう一点ある。あらかじめ配布された資料に目を通すことは学類等代表の負担になると思うが、その点はどう考えているか。

○吉川 柊（議長候補）

本会議の参加者に事前に少しでも内容を知っていて欲しいという思いがあり、余裕を持った告知を行おうと考えている。各資料の概要、議題が提出された背景をまとめておくことで、授業等で忙しく、資料を見る余裕がない人も、ある程度本会議の概要がわかった状態から資料の一つひとつを読んでもらうことができる。これによって本会議についていきやすくなるのではないかと考えている。

あらかじめ資料が提示されていない状態で本会議中に質問などを考えていると、その間にも会議は進行してしまう。事前に知識がインプットされている状態で本会議に臨むことで、本会議がより活発になったり、ついていけない状況がなくなったりするのではないかと考えている。

○近藤 拓未（令和6年度議長）

その他に質問がある人はいるか。

○綱木 映法（社会学類）

いくつか質問がある。

はじめに、属人化について、タスクの割り振りは昨年度の議長団も掲げていたことだと思うが、現時点でどこまで達成されて、もし達成されていないのだとしたら、これからどのように進めていくべきだと考えるか。

○吉川 柊（議長候補）

まずマニュアル整備については、委員長連絡会で各委員長から誰にどのようなタスクが集中しているか報告を受けるところから始める。明らかになったタスクのうち、優先度が高いものから順に各委員会や議長が協力しながらマニュアルを整理する。

○綱木 映法（社会学類）

現時点で具体的に属人化が進行していて優先的に対応しなくてはならないと考えているタスクはあるか。

○吉川 柊（議長候補）

名刺の作成などが考えられる。作成が早いのは良いことだが、1人にタスクが集中している代表例だと考えられるので、早急に改善したい。

○綱木 映法（社会学類）

もう一つ質問したい。議題によって本会議中にかかる時間に差があると思う。他の委員会、例えば学園祭実行委員会や新入生歓迎委員会など、他の機関が関わるものや、学園祭実行計画書の審議等になると、やむを得ず長くなってしまうと思うが、これは仕方がないのか。

○吉川 柊（議長候補）

やはり他の委員会が関わる場合だと、本会議が終わった後に確認する、ということが増えるかと思う。代わりに今年度からは、長くなりそうな議題については積極的に意見聴取会を開きたい。意見聴取会とは、本会議の1週間から2週間前に開催されるもので、事前に質問を集めるための場である。本会議と違って出席を義務付けられているものではないため、出席率が低くなり、結果として本会議の際に新しい質問が出て時間がかかってしまうことも多い。今年度は意見聴取会の質を高めることも心がけていきたい。

○近藤 拓未（令和6年度議長）

その他に質問がある人は挙手してほしい。オンラインの方はリアクションしてほしい。

19時06分までに挙手がなければ投票に移る。

○野澤 沙奈（国際総合学類）

国際化を掲げていたと思うが、マレーシア校の代表者が議会に参加する際に言語の問題があると思う。どのようなフォローを考えているか。

○吉川 柊（議長候補）

現在もマレーシア校の学生とオンラインミーティングを進めていると伝えたが、マレーシア校には日本人の学生とマレーシア国籍の学生がいるので、現在は英語でミーティングを行なっている。今後もマレーシア校特別委員会については、言語は英語で進めていきたいと考えている。理由は、まずマレーシア校特別委員会はマレーシア校の学生が具体的にどうしたいかを伝えるような場であり、マレーシア校の学生がメインになる。そのため全員の共通言語である英語で進めていくべきだと考えている。

仮にマレーシア校の学生が本会議にオブザーバーで参加することになった場合は、筑波キャンパスの学生は全員日本語が話せるので、言語は日本語にしていける。ただ、総務委員会の速記をリアルタイムでマレーシア校に共有し、英語やマレーシア語に翻訳してもらうことで会議についてきてもらいたいと思っている。

○近藤 拓未（令和6年度議長）

その他に質問がある人は挙手してほしい。オンラインの方はリアクションしてほしい。

19時09分までに挙手がなければ投票に移る。

○寺嶋 友海（情報メディア創成学類）

現状として、本会議の告知が遅れているのはなぜだと思うか。

○吉川 柊（議長候補）

本会議の告知が遅れている理由としては、まず、昨年度の本会議で主に扱われた議題は実行計画書や報告書など学園祭に関するものだった。学園祭関連の議題に関して告知が遅れる理由としては、そもそも学園祭実行委員会による資料の提出が遅い場合やその後の学内行事委員会での確認で期限から遅れる場合等があり、本会議の直前に告知することになってしまっていた。

これらの課題を回避するには、最初に本会議の日程を確定させ、それに合わせて資料の提出期限をしっかりと決めていく必要があると考えている。

○近藤 拓未（令和6年度議長）

その他に質問がある人は挙手してほしい。オンラインの方はリアクションしてほしい。

19時13分までに挙手がなければ投票に移る。

○近藤 拓未（令和 6 年度議長）

19 時 13 分までに挙手がなかったので、投票に移る。

（投票の手続きについては省略）

○近藤 拓未（令和 6 年度議長）

開票結果は、信任 62 票、不信任 2 票、無効 1 票となった。過半数の信任を得たため、本年度の議長として吉川柊さんを選出する。

○近藤 拓未（令和 6 年度議長）

続いて副議長選挙に移る。副議長に立候補した人は前に出てきてほしい。

立候補者が 3 名いる。演説は立候補順に行うため、桑原さん、坂入さん、松本さんの順番に発表をしてほしい。

では桑原さんから順番に発表願いたい。

（注：副議長演説は発言の意図を反映するため敬体とする）

○桑原 侑（副議長候補）

全代会副議長に立候補させていただきました、国際総合学類 3 年、桑原です。演説を始めさせていただきます。よろしくお願いします。

まず私がどんな人かというのを、お話します。（スライドには）経歴と書いてありますが、中学・高校のときには生徒会長をはじめ、生徒会役員を経験しました。そして、筑波大学に入学して全代会に入った後は、総合学域群クラス代表者会議の議長や、全代会では生活環境委員会はもちろん、今はないのですが、企画戦略特別委員会、そして、新入生歓迎特別委員会に所属しました。

この企画戦略特別委員会、今はないと申し上げたのですが、この企画戦略特別委員会では全代会が抱える問題や解決法、それに必要な視座を得ることができました。そして昨年度、2 年生になってからは全代会副議長を務めました。

そして副議長としての活動の他にも、全代会に関係するルールについて話し合い、改正点を見つける法制プロジェクトを先頭に立って進めていきました。全代会以外にも、文化系サークル連合会の副委員長や、新入生歓迎委員会で活動しています。冬には全代会の海外研修にも参加しました。今は国際総合学類の議長として全代会に所属しています。

私が考える全代会のミッション、つまり存在目的について説明します。それは、公平な立場から学生の意見を大学運営に反映させること、そして公平な立場から学生へ情報発信を行うこと、公平な立場からアクションを起こすことです。例えば生活環境委員会であれば教育生活環境調査、教育環境委員会であれば BRIDGE の作成です。そしてアクションを起こすことが、筑波大学の学生としての権利を守つ

て、よりよい生活を実現することにつながると思います。それを成し遂げることが私が考える全大会の使命です。

これを大前提として、私のビジョンと公約を申し上げます。ここで皆さん、右と左、ご自分の隣をご覧ください。皆さんの左右には他の学類の学生がいます。このように、全大会、そして全大会の本会議、この場には様々な学類の学生がいます。こうした全大会のメリットを活かしたいと思って、私はこのようなビジョンを掲げます。

「協奏し、共創する」

なぜこのようなビジョンを掲げたかと申しますと、現在の全大会では十分に意見交流ができず、学生代表としての参画意識を持ちにくいことを私が課題として考えているからです。その原因としては、吉川さんが先ほどおっしゃっていたのと重なってくると思うのですが、形式的な「本会議」、「議長」といった関係がよく見られる、横の繋がりが少ない。横の繋がりで言えば、委員会間の交流も少ない。そしてクラス代表者会議の意見反映、クラス代表者会議がそもそもあまり動いていなかったり、クラス代表者会議同士の交流の機会があまり設けられない。こういったことが原因で、こうした課題があると考えています。

このビジョン「協奏し、共創する」を実現するために、私は3つの公約を掲げます。1つ目が本会議改革、2つ目が垣根を越えた交流の創出、3つ目が情報発信収集の強化です。1つずつ説明していきます。

本会議改革では2つの柱を掲げました。1つ目が意見交流の促進、2つ目が意見を求める本質を大事にして本会議を行っていくということです。意見交流の促進では、本会議の議案提出からその本会議の採決に至るまでの過程で議論する時間を十分にとりたいと考えています。これも吉川さんの話とちょっと重なる部分があるのですが、今の本会議では議題の提出がギリギリで、提出された後には資料を読んでもと言われて読んで、採決の前に質疑応答があって、トントンと進んでしまっていて、自分なりの意見を持つための時間があまり確保できていないと考えています。

それを防ぐために、本会議の中で、きちんと自分なりの意見を持つ、そうした時間を持つ必要があると思っています。もう1つ、他の学生と相談する時間を確保する。自分だけではなくて他の学生と相談しながら自分なりの意見を作っていく、そうしたものが必要なのではないかなと考えています。

もう1つの柱、意見を求める本質を大事に。意見を求めるっていうのであれば、あまり形式的すぎなくても、むしろ形式的すぎると自分なりの意見を出せない。そうしたことがあるんじゃないかと思います。合理的な会議進行、そして読みやすい会議資料、そしてもう1つ、賛成反対保留を超えた意見交流の促進。賛成反対、その裏に皆さんが持っている意見、学生としての意見があるのではないかと考えています。

そうしたものを実現することによって、やりがいがある、そして参加したいと思えるような本会議ができるのではないかと考えています。

次に垣根を越えた交流の創出。こちらも3つの柱を掲げています。1つ目が学類、そして2つ目が委員会、3つ目が役職、これらの垣根を越えたいと考えています。

1つ目、学類等の垣根。皆様にはクラス代表者会議やクラス連絡会の情報共有をお願いしたいと考えています。その具体的な例として、2、3ヶ月に1回、クラス代表者会議のクラス代表であったり議長だったりの交流会を実施できればと考えています。

2つ目、委員会を超える。それは、普段の活動や、週に1回の委員長連絡会などの場を利用することによって、連携を促す。それを副議長として私ができると考えています。そして、各委員会の活動の枠組みにプロジェクト単位でもあらゆる委員会からの参加を奨励したいと考えています。実際、私が所属する生活環境委員会では、他の委員会から「手伝いたい」と言ってやってきてくれている人もいます。そうした動きを促進したいと考えています。

そして3つ目、役職の有無を超える。これは海外研修の知見をもとに、（スライドを指さし）ここに書かせていただきました。委員長連絡会の参加、誰でも歓迎します。私が1年生の頃まではこの風潮があったのですが、昨年なぜかなくなってしまったので、ここで復活させたいと考えています。

そして、必要に応じて例えば委員長補佐や、副議長補佐、委員長補佐といったものを設置する。1年間学ぶ、そうしたことができる全代会にしてもいいのではないかと考えています。そうしたことを通してノウハウを共有したい。あとは蓄積することもできますし、また協働による価値創造、みんなで何かいいものを作っていく、そうしたことができるのではないかと考えています。

最後に情報発信収集の強化です。SNSやホームページでの情報発信強化、そして情報収集後のフィードバック強化、この二つの柱を掲げます。

1つ目、SNSやホームページについては、広報委員会や総務委員会が全代会について説明するホームページを持っています。そしてそこで情報発信を行っています。それを私が副議長として、他の議長団や他の委員会と協力しながらサポートしていきたいと考えています。

そして、他の学生組織や大学組織、全代会だけじゃなくて、他の組織にも有益な情報を流しています。そうした情報を全代会が後押しする形で、Xであればリポスト、そうしたものを促進することによって、学生へ全代会のことを伝えていく、有益な情報を伝えていく。そうした動きを作れるのではないかと考えています。

そして2つ目、情報収集後のフィードバック強化。教育生活環境調査の回答率が低いことが問題として挙げられるときがあります。アンケートに回答したいと思うには、アンケートを送ってそれからフィードバックがないと、なかなかちゃんと自分の意見が反映されているのかわからないと思います。そのためのフィードバック強化です。

今、調査委員会がやっているのが、アンケート回答者への追加調査をする。そうしたものを通して、「自分の意見が届いているんだ、自分のことをもうちょっと喋ってみよう」というような動きを作れると思います。

そして、ちょっと省略して（スライドに）書いてしまったのですが、教育環境委員会、生活環境委員会、調査委員会による全代会ホームページ、SNSの活用。これによって、アンケートにきたものに対して何かしらの対処をするわけですが、その対処した結果を学生へ早く伝えることができる。そういったことを通して、「全代会が学生の意見を聞いてくれるんだ」、「私の意見をもっと聞いてください」といった動きを作る。学生にそういうふうに思われる全代会を作っていきたいと思っています。

ここまで私が公約を語ってきましたが、ここにいるおふたり、多分この後発表があると思うんですけど、大体一緒に活動してきた仲間ですから、向いてる方向は同じだと思います。そこで私がおふたりと違うと考えているのが、強みとして持っていると思うのがこの2つです。副議長としての知見を持っていて経験があること、そして全代会に関連する規則に対する造詣が深いこと、この2つを強みとしてお伝えしたいと思います。

昨年度の副議長として1年間過ごしてきましたので、新しい議長団になったとしても、私が「去年はこういうふうにやっていたよ」と助言をしたり、あとは「こういう伝手があるよ」とか、「こういう経路で意見を伝えればいいんだよ」ということは知っていますので、議長はもちろん、全代会構成員の皆様に対しても私が提供できるものがあると考えています。

そして関連規則に対する深い理解ですね。今回のもう1つ議題があるのですが、そうしたもので今、規約を変えるみたいなことが最近よく起こっています。そうしたものの多くは私がリードしてきたのですが、そのような場面でも私の規則に対する深い造詣を全代会のために役立たせることができると考えています。

「競争し、協奏する」。この言葉のもと、皆さんと全代会をもっと良くしていきたいと考えています。そして筑波大学をより良くしていきたいと考えています。どうぞ私に貴重な1票、よろしくお願いします。ご清聴ありがとうございました。

○坂入 快（副議長候補）

この度全代会副議長に立候補いたしました、化学類の坂入と申します。よろしくお願いいたします。

私は1年生の頃に、クラス代表者会議副議長として全代会に入りまして、調査委員会に所属しました。2年生となった昨年度はですね、クラス代表者会議議長と、調査委員会の委員長を務めさせていただきました。ですので、今年で全代会は3年目でございます。数えてみたのですが、18回目の本会議、我ながら、頑張ったと思います。

比較的長く全代会に所属してきた私ではございますが、全代会の現状について1点課題を感じております。全代会は筑波大学に公的に定められた組織です。それにも拘らず、筑波大生、つまり、学生からの認知度というものは極めて低いと感じております。

（スライドを示し）こちらには私が実際に学類の友人から受けた言葉を載せました。これを聞いて、私は悔しいと感じました。もちろん今この場にいる方々も、自ら全代会に入りたいと言って積極的に来てくれた方もいれば、もしかしたら渋々学類等代表を引き受けてくれたという方、いろんなバックグラウンドがあって、今この場にいるのは承知の上ですが、しかし今ここに本会議に参加している学類等代表の皆さんと、そして専門委員として全代会に所属している皆さんと、全員それぞれが自分の時間を割いて全代会の構成員として活動してくれているわけです。

それを「意味ない組織」みたいな、このような言葉で片づけられてしまって良いのかなと、私はそこに悔しさと同時に疑問を感じました。そして何よりもこれは全代会構成員の皆さんのモチベーションの減少に繋がると思います。いざ全代会で頑張ったときに、周りからは「何か意味ない組織」みたいな、あるいは「大変そうだね」とそうやって評価されれば、誰でもやる気は下がってってしまうものだと思います。

そして、やる気、モチベーションが下がれば、当然全代会内部の活動というものはどんどん停滞していきます。そして、内部活動が停滞すれば、また全代会の学生への認知度が下がって、そしてモチベーションが下がり、活動が停滞し、負の連鎖はどんどん続いていってしまうと私は感じました。これを私は止めたい。つまり、全代会の学生に対する認知度と全代会構成員皆さんのモチベーション、この2つを引き上げたいと考えました。これが私が副議長に立候補した理由です。

ここからは副議長として私が成し遂げることにについて、すなわち公約についてお話させていただきます。もちろん副議長という立場ですから、議長のサポートをしていくことは当然かと思います。ここに加えて2点ほど私が副議長として肝に銘じておきたいことを書かせていただきました。それがこちら、「見通す目」と「聞く耳」でございます。

といいますのも、「見通す目」というのは、全大会の全体を見て、全体を見るこの視点のこと。そして「聞く耳」は、構成員各人の声に耳を傾けること。私はこの2点、副議長として肝に銘じたいと思います。

以上を前提に私は次の3つの公約を掲げました。1つ目が全大会全体の把握でございます。皆さんそれぞれにいろんな考えを持っていますから、例えば「こういうことをやりたい」という人がいたりとか、それとも「実はこういうことに困っているんだ」とか意見や要望があると思います。まずは話を聞く、話し合う、会話をするということをしたいと思います。

例えば、委員長連絡会というものの、全大会では各委員会の委員長が週に一度集まって、「うちの委員会ではこういうことがあって」というのをしっかり意見交換した上で、さらに議長・副議長がランチミーティングで大学側と話をする機会がたくさんあります。ですから、それを活用したり各委員会、それぞれの委員会に訪問していくことを通じまして、まずは構成員の皆さんと対話します。

人と人ですから、まずお話し合いをします。そうしたことを通じて、「今こういうことが困っているのだ」とか、「こういうことがやりたいである」とか、そういったタスクの把握とか割り振りをまずはしていきます。

そして2点目ですが、教育生活環境調査の活性化でございます。教育生活環境調査とは、ある意味、学生が大学に対して「こういうところが不満だ」とか、「こういうところに困っている」というのを全大会に直接ぶつけられる、それを送ることができる、すなわち学生と大学との架け橋であると私は捉えています。この架け橋がボロボロじゃ困りますよね。大学会館から第1エリアに向かうあその橋がボロボロじゃ困るじゃないですか。それと同じなのです。

ですから、この学生との架け橋を強化したい。例えば現在、現議長団でポスター掲示の話が出ていますが、活動の周知やSNSを通しての回答の概要の投稿を通じて、この学生との懸け橋、教育生活環境調査というものの周知に取り組んでまいります。

今SNSという話出ましたが、3点目が、SNSの活性化です。委員会であるとか、本会議の様子であるとか、こう言った全大会が活動している場をしっかりとアピールしていこうと、そういうことで、もっと全大会を知ってもらおうと言っているわけです。（スライドに）「適切に」と書きましたが、「適切に」とはつまり、全大会研修会でもありましたが、いろんな「〇〇らしい」という情報がたくさん入ってきますから、不確定な未確定な情報も入ってくるわけです。それをただ「何々らしいよ」って発信するのは違いますよね。そうじゃなくて、確定した正しい情報をもっと学生に広めていこうよという意味で「適切に」と申しました。

そして今、全大会に関する外部向けの質問箱を設置したいと考えております。今例えば学生、全大会の外部の全大会に入っていない学生が、全大会についてこういうことを尋ねたいと思ったら、メールかDMをするしかありません。ちょっとハードルが高くないですか。そうではなくて、質問箱といいますか、フォームのような、そういった外部向けの質問箱を設置して、もっと親しみやすい全大会にできないかということを模索してまいります。

以上3点が私が副議長として成し遂げることでございます。全代会の把握、教育生活環境調査、そしてSNSの活性化を前提には、「見通す目」と「聞く耳」、全体を把握することと、構成員それぞれの意見に耳を傾けると、これを前提として、私はこの3つを成し遂げます。

最後になりますが、私は副議長という立場で「前に立ってまとめてやっていこう」と、公約を掲げて、それを遂行していこうと思いますが、しかしそうはいつでも全代会の一構成員です。皆様と決てかけ離れたところにいるつもりはございません。皆さんと一緒に全代会を作っていきたい、その覚悟でここに臨んでおります。

全代会を皆さんとともに、そして全代会を皆さんのもとの。構成員の皆さんが全代会に入つてよかった、所属してよかったと、また明日も全代会に行きたいと、そう思える空間作り、空間作りを何よりも実現してまいります。長くなりましたが、全代会を皆さんとともに、そして全代会を皆さんのもとの、私は副議長として取り組んでまいる覚悟です。ぜひ貴重な1票をよろしくお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

○松本 明香里（副議長候補）

皆さんこんにちは。応用理工学類2年の松本です。ただいまから、私の副議長選挙の演説をさせていただきます。

今2年生という話をしたのですが、自己紹介として私が1年生のとき、どのようなことをしていたのかを少し知ってほしいと思います。私は教育環境委員会と新入生歓迎特別委員会に1年生の頃所属しておりました。

教育環境委員会では、教育生活環境調査の対応やBRIDGEの制作に携わってまいりました。皆さんBRIDGEご存知でしょうか？新入生の方、研修会などで、見ていただく機会があったかと思います。こちらの制作にも携わってまいりました。

また新入生歓迎特別委員会の方では、五者面談、学類の新歓と全代会以外の学生組織との架け橋となるような役割であったり、あるいは、宿舎入居支援、宿舎入居の日のお手伝いであったりにも参加させていただきました。

また何回か話題にも上がってきたと思うのですが、昨年度末に台湾大学やマレーシア工科大学を訪れる海外研修にも参加し、学生組織間での意見交換などを行ってまいりました。

そして今年度、私は、学類のクラス代表者会議の議長、また教育環境委員会では、BRIDGEを担当。新入生歓迎特別委員会では、委員長を務めさせていただいております。

そんな私は副議長として、「居場所としての全代会」を目指していきたいと思います。

こちら「居場所としての全代会」を実現するために、三つの公約を掲げていきたいと思います。1つ目、委員会を超えた繋がりへの促進、2つ目、教育生活環境調査の活用、そして最後3つ目、全代会の知名度アップ。それぞれについて詳しく説明していきます。

まず1つ目、委員会を超えた繋がりという点で、皆さんそれぞれに委員会、研修会で自分がどこの委員会かということ、新規構成員の方は知ったと思うのですが、また去年からいらっしゃる構成員の方でも、委員会活動をされてきたと思います。一方で、自分の委員会以外の活動のことをご存知の方ってどれぐらいいるのでしょうか？

私が1年生のときに活動している中で、やはり自分が所属していた教育環境委員会、また新入生歓迎特別委員会以外の方との接点はあまりないように感じました。自分がやりたい委員会のことだけをやっていたらいいのかと言われたら、全代会ってそういう組織ではないと思うようになりました。委員会、全代会にせっかく入ったにも関わらず、委員会同士の交流がないというのも寂しいものだと思います。

また、今、教育環境委員会、生活環境委員会、調査委員会であれば教育生活環境調査などでの連携も多く生まれてくるはずです。ですが私は1年生の頃、そちらについてあまり存じ上げませんでした。というのも、委員長や上級生の方が、基本的には他の委員会との架け橋であるとか、その交流の部分を担当していたという部分があります。

委員会活動をする上で、1年生であるとか新しい構成員の方、もっと自分でやりたいこととかあると思うんですけど、それを委員会内部で解決するっていうことは、あまり特に教育環境委員会、生活環境委員会、調査委員会などではあまり感じないという点があります。ここで私は、委員会を超えた繋がりを促進することということで、委員会活動の活発化、また、構成員のモチベーションアップを図っていきたくて考えております。

この方法として、私は副議長として各委員会に密接に関わっていきたいと考えております。というのも、委員会って週1回です。週1回の活動だけだと、曜日が違ったりするとほとんど交流がないということになってしまいます。そこで副議長として私が各委員会を回り、その状況を把握し、他の委員会との橋渡しの役割を担っていきたいと考えております。

続きまして2つ目、教育生活環境調査の活用です。皆さん教育生活環境調査、先ほどの坂入さんもちよっと説明があったかと思うのですが、あんまり教育生活環境調査自体が知られていなかったり、またレスポンスが遅い、フィードバックがあまりなされていないのではないかとと言われてしまったりもします。

それは全代会としての意義の部分にも関わってくるかと思います。なぜなら全代会って、各学生の意見を反映させるという役割を担っているからです。こちら、副議長として、早めの教育生活環境調査に関するレスポンスであるとか、ホームページへの掲載の促進を行うことによって、全代会に投書した意見が反映されていると多くの学生に思っていたきたいです。このような取り組みそれ自体が全代会の知名度アップにも繋がっていくと考えております。例えば何か困りごとがあったときに、Googleとかで検索してみると、そこに全代会の教育生活環境調査の答えが載っている。そうすると「全代会こんな活動をしているんだ」、「こんなふうに学生の意見をちゃんと聞いてくれているんだ」というふうになり、全代会の知名度アップに繋がっていくと考えております。

最後に、これは2つ目のものと絡むのですが、全代会の知名度アップを公約として掲げます。全代会の知名度といいますと広報ということで広報委員会が思い浮かぶと思うのですが、現在の全代会の広報は、広報委員会だけの広報になっています。広報委員会は広報を主たる活動としているので、広報委員会が担うべきではあるのですが、広報委員会も、一番最初に私が問題として掲げたのと同じように他の委員会のことを知らない、わからないという状態にあるんです。

そのような状態で広報をすることは難しい。広報をする対象に対して、わからない状態では広報の指針も示せません。そのような指針と一緒に議長団として考えていきたいと考えております。それを通して全代会の知名度アップを図っていききたいなと思います。

続きまして私の強みについて説明したいと思います。前のお二方は3年生でしたが、私は今現在2年生です。各委員会、自己紹介のときに2年生のというふうに聞いたと思います。実は各委員会の委員長の多くは2年生です。

2年生と同じ学年ということで委員長と同じ目線、また、話しやすさという点で私は委員長をサポートできる。より他の3年生の先輩方と比べて、話しかけやすい位置にいると思います。そのような人が議長団にいることによって、委員会を超えた繋がりもできやすい。委員長連絡会でも、会議がしやすいということが考えられると思います。

また、私は1年生のとき、教育生活環境調査を見てきました。BRIDGEの制作を経験してきました。海外研修にも参加してきました。この経験を通して、学生の意見収集方法への知見、また海外の大学の学生組織の運営の実態等も学ぶことができました。これらを先ほどの公約3つに生かせると考えております。

まとめますと、委員会間の繋がり、学生の意見の反映、全大会の知名度を上げるということで、構成員のやりがいやモチベーションアップに繋がりたいと思っています。このように、やりがいやモチベーションを上げることで、皆さんが全大会を少しでも居場所として、コミュニティの1つとして、思っただければと思います。

ということで、私は「居場所としての全大会」を掲げて副議長に立候補いたします。これで演説とさせていただきます。どうか私に貴重な1票をよろしくお願いします。ご清聴ありがとうございます。

○近藤 拓末（令和6年度議長）

それでは質疑応答に移る。質問がある方は挙手もしくはオンラインの方はTeamsのリアクション機能を用いてリアクションしてほしい。質問をする場合は誰に質問するかというのも合わせて申し上げるように。その場合1人である必要はないので、質問したい方全員の名前を挙げてほしい。質問がある方は挙手を願いたい。

○吉田 伊吹（工学システム学類）

桑原さんと坂入さんの方に質問をしたい。まず桑原さんから。賛否を超えた意見の収集という点があったと思う。具体的にはどういう方法で収集するのか。それと、フィードバックの後でそれらをその結果をどう反映するのかについてお聞かせ願いたい。

○桑原 侑（副議長候補）

賛否を超えた意見交流の促進ということで具体的にどうするかということだろうが、意見聴取会というものは、それこそいろいろなルールが決まっていないからこそいろいろな意見を出しやすい。

私はこれまで2年間、本会議とか意見聴取会に出てきているが、比較すると意見聴取会の方が意見が多い。そういった場合、本会議の前に意見聴取会を開催するというのはもちろん、本会議の中で、ここに書いてある通り、意見交流の促進、議論の時間を十分に確保すると書いてあるのだが、それを合理的な範囲で進行と書いてあるので、いろいろと省略できる部分があると思っているのだが、出席確認など形式的な部分で時間をかけて21時位までやってしまうということがあるので、そこを省くことによってある程度時間が生まれると思っている。また、出席確認している間、席に並んで座っているが、最初

から座っている必要はないわけで、グループを作るなり議論する時間というのを、本会議の中に取り出すことができると思っている。

そこで、「自分はよくわからないのだがどうなんだろう」というのを相談したり、「自分はこう思うのだが、どう思う」などと意見交換する時間をとることで、意見聴取会というふうに本会議の外側で設けるのもありだと思う。吉川議長やもう1人の副議長、また運営する上で不可欠な総務委員会、と調整しながら、時間を設けていきたいと思っている。

また、質疑応答というふうに、本会議で設けられていると思うのだが、質疑応答じゃなくて意見を述べる。次に「自分はこう思うのだが皆さんどうですか」と言った発言をする場としても利用してもいいと思う。そうすることによって賛成・反対・保留という投票だけではなく、なぜ賛成に投じたのか。反対に投じたのかという意見を他の人に共有して、そのフィードバックもお互いに受けることができる。

○吉田 伊吹（工学システム学類）

続いて坂入さんに伺う。知名度アップということを掲げていたのだが、どうやって増やしていくのかというところがあまり自分には分からなかったのでお聞きしたい。

○坂入 快（副議長候補）

大きくはやはり SNS だと私は感じている。やはり SNS が活性化、例えば X が具体例になるが、活性化することによって、まず「活動しているのだな」ということを知ってもらうのが一番早いかなと私は感じている。

現在も全大会の X アカウントでホームページに載っている教育生活環境調査への回答について「こういう回答があったよ」というのを SNS で挙げたことがあるが、このようなものにはインプレッションはかなり多い。そういったことから始めて、委員会や本会議の様子を適切にアピールしていくことを通じて全大会が動いていることを知ってもらうというところが最初的手段かというふうに考えている。

○吉田 伊吹（工学システム学類）

筑波大学の学生が1万人いると言われていると思うのだが、それなのにフォロワーが2500人で全体の4分の1なのだが、これをどう思われるか。

○坂入 快（副議長候補）

筑波大生が全員 X を入れるかどうかかわからないが、あくまでやはり全大会は筑波大学に公的に定められた組織ということを強調したい。本来はもっとフォロワーがいても良いと思うし、単純なフォロワー数だけでなく、やはりもっと見られたい、もっと全大会という存在が知られてほしいと思っている。

そのような思いを念頭に活性化に取り組みたいと思う。

○近藤 拓末（令和6年度議長）

その他に質問等がある方は手を挙げてほしい。

あわせて 20 時 30 分から投票を行いたい。教室の時間の都合もあるので、できるだけ質問と回答は端的に行うようにご協力をお願いする。

○相川 大惺（医学類）

まず桑原さんと松本さんに質問である。情報発信に関して、教育生活環境調査の知名度アップの具体的な方法として、アンケートに対するそのフィードバックを強化するという話があったと思うのだが、アンケート自体の回答数を増やすという方向については、何か取り組もうと考えているだろうか。それとも、もうそのレスポンスの方に全力を注ぐという形だろうか。

○桑原 侑（副議長候補）

回答の量を増やすというものとフィードバックの方に力を入れるかというふうな質問だったと思うのだが、私はそもそも回答してもらうためにはやっぱりフィードバックが必要だと考えているので、私としてはフィードバックに力を入れたいと考えている。そのために、教育環境委員会、生活環境委員会、調査委員会と SNS のアクセスをより良くする、それによってフィードバックをするというところに力を入れようと思う。そもそも回答しても、それが役に立つというふうに感じられないと、やはり回答数が増えるものではないと思うので、私はそちらに力を入れたいと考えているということである。

○松本 明香里（副議長候補）

最初に教育生活環境調査の回答数を増やす方法の方はいかがなのかということなのだが、調査委員会の方で教育生活環境調査を周知するようなポスターがあることを伺っている。

委員会の方で既に教育生活環境調査の周知の動きがあるということで、副議長としてやるべきことは教育生活環境調査のフィードバックだと考えている。

私は教育環境委員会の方で 1 年間、教育生活環境調査を見てきた。その知見から、より素早くフィードバックをすることができると思うし、教育環境委員会や生活環境委員会の方でもフィードバックを行ってはいるが、週 1 回のミーティングということもあり、なかなか動きづらいという現状がある。

その中で教育環境委員会にいたという私の経験をもとに、スムーズに素早いレスポンスが可能であると思う。また、レスポンスを早くすることによって、よりちゃんと意見が反映されているのだという実感が伴うことで、おのずと回答率が上がっていくのではないかな。

○相川 大惺（医学類）

続いて坂入さんに質問がしたい。

○近藤 拓末（令和 6 年度議長）

質問の内容を述べてほしい。

○相川 大惺（医学類）

全大会の外部向けの質問箱を作るという話があったと思うのだが、形式はどのような形式を考えているのか。

例えばホームページに載せるのか、もう物理的に学校のどこかに質問箱を置くのかなど、どのような形式を考えているだろうか。

○坂入 快（副議長候補）

形式としては、現在教育生活環境調査のようなフォームの形式を考えている。私としては外部向けの質問箱の方を設置。これの意図としてはやはり全代会について聞きたいと思ったときに、メールやDMというものがハードルが高いのではないかというところからこれを考えたが、そういった上でフォームというものは送りやすい手段なのかなと思う。

少し物理的に、支援室とかに箱を置いたときに、そこに歩いて行って意見を投入しに行くか、そういうことができるぐらいであれば最初からメールやDMに問い合わせてくれると思う。であるので私としてはこの外部向けの質問箱というのは、教育生活環境調査のようなフォームの位置づけを考えている。

○相川 大惺（医学類）

最後に松本さんにもう1つ質問をしたい。委員会間の橋渡しをしたいという内容があったと思うが、具体的な案について、具体的にどうということをするのかについて詳しく教えていただきたい。

○松本 明香里（副議長候補）

例を挙げると教育環境委員会、生活環境委員会、調査委員会は教育生活環境調査の実施において連携を行っている。それぞれの委員会の活動曜日が異なっているのだが、（副議長として）3委員会のミーティングに参加したりであるとか、議事録の方を見たりすることによって、それぞれの委員会がどのようなことをしているのかというのを、他の委員会に自分が出向いて伝えるということがまず1点。

2点目としてどの委員会で誰が何をしているのかわからないというのがあるので、他の委員会が何をしているのかを、週1回まとめたようなものを、Teamsの方を用いて、紙資料にまとめて発信するというようなことを考えている。

もちろん誰でもその委員会のミーティングの議事録を読むことができるが、わざわざ見ることは少ない。また、議事録が各委員会にそれぞれ異なり、しっかりと取られていないものもある。これはまた別の問題だとは思いますが、その手間を省きたい。

○近藤 拓末（令和6年度議長）

その他に質問等ある方は手を挙げてほしい。左から順番に当てていく。

時間の都合上、今手を挙げた方を最後とする。工学システム学類、吉川さん。

○吉川 柊（工学システム学類）

桑原さんに質問がある。昨年度も副議長を務めていたと存じ上げているのだが、昨年度、自身が行ったことの中で成果を上げたものや、特に印象に残っているものであったりがあればお聞きしたい。

○桑原 侑（副議長候補）

成果と言えるかどうかかわからないが、以前から続いていた全大会のあり方についてルールの改正、そちらの議論を停滞させることなく続けていけた。法制プロジェクトのことである。ルールをどういうふうにしていくかというものの話し合いを先導して引き続きやっていけたのは私にとっては大きな成果となったといえよう。規則は全大会がどういったやり方でやるかというのを定める1つの議論なので、そちらがきちんとしていないと、全大会がこれから続いていく上で、規則と実態の乖離が生じてしまう。そのようにならないようにする議論をしていけたのは私にとって大きな財産になっているかと思っている。

○近藤 拓末（令和6年度議長）

先ほども繰り返し言ったが、質問と回答は、端的に願います。

○岩渕 泰知（社会工学類）

桑原さんにお聞きする。「意見を求める本質を大事に」というところについてお聞きしたい。先ほどの答弁で、本会議始まってからグループをつくって意見交流するみたいな話があったと思うのだが、意見を求めるというのは具体的にどういうことか。

○桑原 侑（副議長候補）

意見を求めるというのは、抽象的だ。自分がもっと緩くした方がいいと思っているのが、今の本会議にある賛成・反対・保留、それをどういうふうを超えていくことで本質的な意見を求めるかというのを実現するかというものである。

先ほどお話しした通り、対面もしくはオンラインで本会議に参加し表決を行うのだが、賛成反対の理由だけにはとどまらないので、その裏に皆さん投票する理由があるに違いない。

相談することによって他の人の意見を知る。それによって自分の意見が変わるかもしれない。むしろ、それによって自分の投票する選択肢を変えることができる。そもそも会議できちんと自分の意見を持って投票できていない。それはつまり皆さんの意見がちゃんと本会議の結果に反映できていないということなので、そもそも時間を十分に確保し自分の意見を持つ機会をもつ。

その次に、先ほど申し上げた通りに、皆さんグループ作ったり、そういった意見聴取会があったりして、そのような場に自分の意見を持った状態で共有し、自分の意見を変えない、もしくはさらに構築していくことが必要だ。そのようなことでより意見が反映される。そういった形を意見を求める。自分の意見がきちんと反映される、そういった形で記載させていただいた。こちらで回答になるだろうか。

○岩渕 泰知（社会工学類）

「意見を求める」というのは、各構成員が自分の投票するうえでの参考になるという意味で言っているということでは間違いないだろうか。

○桑原 侑（副議長候補）

手助けというよりは、自分の意見をきちんと、ただ単に面倒くさいから賛成とかではなく、きちんと意見を持って賛成を投じてほしい、ということである。

○岩渕 泰知（社会工学類）

投票方法を改正して、それが賛成反対だけではなく理由付きで書かせるとかそういう意味か。

○桑原 侑（副議長候補）

それが私にとって良い方法だと思っている。しかしながら、実際、本会議で採決をする際にそれを全部読み上げていくと時間が来てしまい、全てを反映させることはなかなか難しいと思っている。だからこそ、投票した後じゃなくて投票する前の時間を充実させていきたいと考えている。

○岩渕 泰知（社会工学類）

現段階でもだいぶ長めの時間を要している。先ほど、吉川さんが議長になるときの演説で、現在の問題点として長時間の本会議というのを挙げられていた。今提示したやり方でどのように時間的制約をクリアすることができるのかという懸念がある。実現可能性は如何か。

○桑原 侑（副議長候補）

会議を開始するまでの時間を用いたい。会議開始するまでの時間、徐々に集まっていく。全員出席ではない限り出席確認する時間がある、そのような時間を利用することによって、私が最初に申し上げたようなグループを作ってみたいことができる。そのため、実現可能だと思う。

○岩渕 泰知（社会工学類）

去年様々な改革を見てきたが、特に秋の新入生歓迎委員会の申し合わせに関しては、毎回何か変更したイメージがあった。もう少し実効性のある改革をお願いしたい。

○近藤 拓末（令和6年度議長）

繰り返しになるが質問と回答は端的にお願いする。次、数学類、黒田さん。

○黒田 大翔（数学類）

組織や委員会において、「この仕事をしたい」と思ってくれた新入生に対しての育成は大切だと思う。お三方の演説聞いている中で、桑原さんはちょっと言及があったかと思うが、そういった何か具体的なビジョンとかはあるか。もしなければ、全然今は考えていないで大丈夫だ。桑原さんはもし何か追加あれば。

○桑原 侑（副議長候補）

私のスライドの中にある経歴という部分に、企画戦略特別委員会というのがあると思う。その委員会は活発に動いているという感じではなかった。私が所属したとき、もしくは前の年とかに積極的に進めていた先輩方がいたので、その方から話を聞いて勉強した。

また、委員長連絡会に構成員が少なくとも参加することも有用だと思う。自分よりも上の人たちの話を聞くということ自体が大切だ。日本語には「見取り稽古」という言葉があるが、積極的にこの機会を与えたい。これは新しい構成員に対する育成に繋がっていくに違いない。

○坂入 快（副議長候補）

昨年度の調査委員会委員長として、調査委員会では「誰1人置いていかない」というところを考えていた。まず新入生である1年生が、置き去りにされないということ。何もわからないまま、やりたいことがわからないとか、右も左もわからないまま、こちらに置き去りにされないということを私は大事にしていた。

それを踏まえると、新入生でまだ何もわからないからこそ、まずは各委員会でやることに巻き込んであげるということはずごく大事だと思う。私が各委員長に対して押し付けるというのは少し違うようにも思えるが、各プロジェクトリーダー等に巻き込んでしっかり1年生が置き去りにされないよう、しっかり新入生を巻き込んであげて一緒にやっという場作りを実現するのも副議長の1つの役割かと位置づけている。

○松本 明香里（副議長候補）

まず前提として、新入生が活動する場が委員会になってくと思う。そのようになると、委員会で新入生の教育という面であれば、委員長を中心とする委員会の人たちが主に担って取り組むべき課題であり、副議長、議長団がそこに直接関与するというようなことを考えていない。これは決してその場所を押し付けるという意味では全くなく、本来的にこれは委員会でなされるべきと考えているからである。

例えば、委員会でもし委員長が1年生の教育が難しい、そちらの方にキャパシティを取られてしまっ本来したい活動ができないというような問題があった場合には、副議長として動くということは考える。また1年生から、「このようなことをやってみたい。」桑原さんが言ったような「委員長連絡会に参加してみたい」というようなことがあれば、もちろんそれは歓迎する。しかし、新入生の教育や、最初に全代会にどのように関わるかは委員会だと私は考えている。

○近藤 拓末（令和6年度議長）

その他、質問がある方は手を挙げてほしい。先に宣言をする。本日の投票が十分な時間が取れないことを鑑みて、投票について、現在対応を検討しているが、少なくとも本日、投票の開票までは行わない。社会学類、中村さん。

○中村 文哉(社会学類)

生活環境委員会で委員長をやっており、お三方とも、その全代会の知名度について何か課題意識を持っているようだ。しかしながら、今までも3人が言うようにSNSとか広報誌 Campus を使用して、全代会の活動をわかりやすくまとめてきた。ただ、でもそれでも全代会の知名度は低いのではないかな。そのような現状を鑑みるに、知名度を上げるには、やっぱり新しいことを始めたほうが良いと思われる。し

かしながらそのお三方の演説の中にはそのような気風を感じることはできなかった。従来の既存の活動が成果を上げていないのだから新しい活動をまず始めていくということに対して、どう思われるか。

○松本 明香里（副議長候補）

既存の活動によって知名度が上がっていないという状況があるにも関わらず新しい活動はしないのかという質問でお間違いないだろうか。

○中村 文哉（社会学類）

大丈夫だ

○松本 明香里（副議長候補）

まず既存の活動が成果を上げていないというような点につき、既存の活動がそもそもちゃんと機能しているのかという点に私が問題があると思っている。

例えば、広報委員会で、先ほど私の演説の中で申し上げたように、広報が広報委員会だけのものになっているという現状がある。例えば、広報委員会の活動以外にも、私達に広報の仕方はたくさんあり、全大会のジャケットを着て宿舍入居活動をしているだけでも広報になっている。そのうえで、Campus や特に SNS が、昨年度までは活発ではなかったという現状がある。各委員会で知名度を上げることをせず、広報委員会が広報の担当としてそこに委ねてしまっているという現状がある。

このように既存の活動がそもそも特に広報に関して機能していないという状況があるので、それに加えて新しい活動という点について、私はそこまで考えていない。

新しい活動をしたところで、例えば、単発的にイベントをやったとしても、それは一時的な知名度アップにしか繋がらない。恒常的な知名度を上げるためには、まず既存の活動がしっかりと機能するところから始めるべきだと私は考えている。

○桑原 侑（副議長候補）

松本さんもおっしゃった通り、今の活動をきちんと行うということはもちろん大切である。周知がきちんと行き届いていないという問題がある。個人的な目線では、近年全大会の SNS がきれいになってきている一方で、もう少し学生に近い距離感で行けたらいいなと考えている。全大会のブランドがあるのでそれとの兼ね合いはもちろんあるが、広報委員会でも今 SNS を活発化させていくような話はされているので、そちらに手助けをする形で SNS をきちんと動かして既存の活動を知らしめていくというのはもちろん 1 つの例として考えている。

新しい活動というのをおっしゃっていたが、既に新しい活動がなされている。ご存知ない人もいるだろうけれども、調査委員会の方で、「夢を語る会」を本格的に行うような話があることを承知している。そのように多くの学生が参加できて多くの人の目に見える、そのようなイベントを手始めとして実施していければと思う。このようなものを、副議長として見て、応援していく、支援していく、そういった形で新たに知ってくれる人や、参加してくれる人を作っていきたい。

○坂入 快（副議長候補）

私も内部活動を SNS 等でしっかりと広めていくことによって全大会の知名度の上昇に貢献するとは思っている。全大会の外部向けの活動というか、新しいプロジェクトというイメージでいうと、先ほどの演説では説明しなかったが、調査委員会では昨年、全大会で夢を語る会というものを開始した。確定ではないが全大会の外側に向け行っていく計画がある。いずれにしても、これから新しいことを全大会が行うことは事実で、私も構成員の一員となるのは間違いないので、このような取り組みについてはしっかり見守っていき、私もそこに参加するなり、活動に対して応援していきたいというふうには考えている。

○近藤 拓末（令和6年度議長）

質問がある方は手を挙げてほしい。

社会学類、綱木さん。回答は端的にするようにお願いする。

○綱木 映法（社会学類）

時間がないので、簡潔に質問したい。まず桑原さんにお聞きする。昨年度、副議長を務めているが、法制局から出された議案の中で、選挙管理委員会の設置や学類等代表以外の委員長就任という案が本会議に出されたり、あるいは出されそうになったことがあるが、いずれも成立していない。この事実についてどう考えるのか。また、今後副議長として、あるいは法制局を主導する立場としてどうしていきたいか。

○桑原 侑（副議長候補）

本会議に出したり出そうとしたりしたものが可決されなかったことは事実だ。それは法制局に携わる人数が少なかったこと、私がちゃんと段取りを組んで議論を進められなかったという準備不足に起因するものだと考えている。それと事前に皆さんの意見を聴取することができず、事前の協議が足りなかったということも私は認識している。それに対しては変えていかなければならないと思っている。昨年は知見が不足しており、そのようなところに対して考えが及ばなかった。1年間学ばせていただいたので、その反省を活かして今年度は事前の相談や利害関係者と本会議の前に事前に協議するということに努めたい。

○綱木 映法（社会学類）

引き続き質問をする。本会議の改革について、構成員同士議論をすると言っているが、実質的に構成員の意見の押し付け合いになってしまうことや、その人がもっている意見が偏ってしまったりとする可能性が考えられる。そのようなことはかえって不健全だと思うが、それについて何か対策はあるか。

○桑原 侑（副議長候補）

意見の押し付け合いなどのトラブル回避、考え方が偏ってしまうことに対しては、自分が納得して投票するのがいいと思うが、何かしらのプレッシャーを感じることがないように議長団としてきちんと議場に目を向けておく必要があると思う。議長団は名の通り、会議を司る存在であって、話し合いも含めて統率が取れるようにしっかりやっていきたい。

○網木 映法（社会学類）

続いて、松本さん、お願いします。

○近藤 拓末（令和6年度議長）

質疑応答中に失礼する。ただいまの時間が20時48分で、投票に十分な時間があると判断できない。従って本日の投票は行わない。本投票用紙に関しては、手をつけずそのまま机の上に置いておいてほしい。網木さん、質問から続けてほしい。

○網木 映法（社会学類）

教育生活環境調査とかSNSについて、それぞれ各委員会頼りになってしまっている状態を副議長として改善したい、という旨の公約が掲げられていたかと思うが、これでは副議長の負担がかなり増大してしまうのではないかと思う。副議長は元来、スムーズに広報が行われるように、あるいはスムーズに教育生活環境調査の回答がなされるように、制度の整備等を行うことが望ましく、そのうえで実務をするために委員会があると私は考えている。なぜそれほど副議長が介入しなければいけないのかということと、介入するとして、それはかえって属人化を促進していないかということについてどのようにお考えかお答えいただければと思う。

○松本 明香里（副議長候補）

教育生活環境調査であるとかSNSについて、副議長主導になってしまい、属人化に繋がっているのではないかということについて、先ほどの演説で私の説明不足があったようだ。教育生活環境調査のフィードバックであれSNSであれ私自身が、というよりは、各委員会と協力して行っていくものであることをまず、強調させていただきたいと思う。

私が全て行うというわけではなく、委員会、委員長と協力して行っていくことを強調させてほしい。

そしてまた属人化してしまうのではないかということだったが、今言ったように私が個人で主導していくというよりは、委員会、委員長と協力して、一緒にやっていく、その手助けをしていくという意味であって、決して私1人でやらない。またその過程でマニュアル化など他の属人化防止の取り組みも行っていきたい。

○近藤 拓末（令和6年度議長）

その他に質問がある方はいるか。教育学類、カーニーさん。

○カーニー 晴希（教育学類）

教育学類議長のカーニーである。お三方に質問する。副議長になった後、最優先で取り組んでいきたいことは何だろうか。それぞれ簡潔にお願いします。

○松本 明香里（副議長候補）

私は最優先に行うべき事項としては、公約で掲げた3つというよりかは、あまりにも当たり前なので挙げなかったのだが、まずタスクの把握、各委員会の状況の把握、連携の強化を行っていきたいと考えている。

○桑原 侑（副議長候補）

早くやっていきたいと思うのは垣根を越えた交流の創出だ。学類の壁、委員会の壁、役職の壁と（スライドに）書いたが、その中でも役職の壁というのは委員長連絡会に参加するということで解消することだと思うのですぐに取り組みたい。あとは学類の壁を超えるために、交流会を行いたい。

○坂入 快（副議長候補）

SNSの活性化である。全大会の外部向けの質問箱を早急に設置しよう。

○近藤 拓末（令和6年度議長）

質疑応答をただいまをもって、一度終了とする。

次回について先に説明する。

では一度ここで休会の宣言をする。

来週の水曜日、今日と同じ時間に続きを行う。

この後、フォームを公開して質問を受け付ける。3名に対する質問を受け付ける。その質問に対する質疑応答を最初に行い、その後、第1回目の投票を行う。

そのため、各位においては3A403教室に来週、5月14日水曜日18時半に出席いただくようご協力をお願いする。

議長団選挙、決まるまで終わらないので何卒ご協力をお願いする。代理出席等も活用してほしい。

休会

以上、総務委員会作成